The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フランス革命期におけるデカルト像　ルイ・セバスティアン・メルシエ対ルネ・デカルト : 十八世紀フランスにおけるデカルト主義の運命に関する思想史的考察 (2)
Author(s)	山口, 信夫
Citation	カルテシアーナ. 1991, 11, p. 15-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66943
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フランス革命期におけるデカルト像

ルイ・セバスティアン・メルシエ対ルネ・デカルト
——十八世紀フランスにおけるデカルト主義の運命に関する思想史的考察（2）

山　口　信　夫

現在，デカルトの遺骸がサン・ジェルマン・デ・プレ教会に安置されていることはよく知られており，訪れるひとも少なくない。しかしデカルトがヴォルテールとルソーに次ぎ革命以前の人物として，パンテオンに安置されるはずであったことは，あまり知られていない。1793年，国民公会でデカルトのパンテオン入りは承認されたが，恐怖政治の影響でその実施が延び延びになり，1796年に再度この件が五百人会 Conseil des Cinq-Cents で審議されたとき，強力な反対者が現われ，動議の採決は延期された。その後，曲折を経て，デカルトの遺骸はサン・ジェルマン・デ・プレ教会に落ち着くことになる。デカルトとパンテオンの因縁についての研究は，若き日のグーイエ（H. Gouhier, 1922）が論考を書き，またフランス革命二百年を記念する研究会でクメ E. Coumet が研究発表を行なっている。グーイエは資料を Moniteur に依り，クメは五百人会の公式議事録に依る。クメは資料の点で新味はあるが，内容においてはグーイエと大きく変わらない。何故デカルトのパンテオン入りが意図され，また何故それが延期，事実上中止になったのか，彼のパンテオン入りを阻んだメルシエ Louis-Sébatstien Mercier (1740-1814) がどのような意図でこのような画策をしたのか，またデカルトが何故このような運命に逢うのか。こうした問題に，両者は答えてくれていないように思う。本稿の意図は，少しでもこの問題に迫ろうとするものである。ではまず，デカルトとパンテオンの因縁に関する事実関係をみてみよう。

この因縁は，1791年4月12日に，ル・プレストル・ドゥ・シャトージロン le Prestre de Chateaugiron という人物が，自分の大伯父に当たるデカルトにパンテオン入りの栄誉を与えるように，国民議会議長に要請を行なったことに始まる。コンドルセの自筆で書かれたこの要請状を，公教育委員会が検討し，マリー＝ジョゼフ・シェニエ Marie-Joseph Chénier (1764-1811) が1793年10月2日にその報告を議会で行い，デカルトのパンテオン入りが採択されるのである。さらに，1793年10月4日，議員ギュフロワ Guffroy の発議で，パジュ Augustin Pajou (1730-1809) の作になるデカルトの胸像をパンテオンに設置することが問題なく可決された。しかしながら，1793年9月5日以降から次第に具体化していく恐怖政治の時期にあって，デカルトのパンテオン入りは実行されずに終わった。1794年7月27日，革命暦3年テルミドール九日の反動以降の五百人会で，この件が再検討される。1796年1月30日，学士院は1793年に国民公会が採択したデカルトのパンテオン入りを実現するように，五百人会に要請する。4月18日には，議長ルトゥーブヌール Letoubneur がこの要請を早急に検討するように演説する。5月7日に，その検討が議会でなされた。しかし事情は93年の国民公会とは大いに異なっていた。まず，シェニエが支持演説を行なう。それに対してメルシエが反対演説を行い，それが大きな影響を与え，結局，この動議は延期，事実上デカルトのパンテオン入りは中止となる。(Gouhier)

この日の議会の様子を，Moniteur は，次のように伝えている。「花月 floréal 18日の議会。シェニエはルネ・デカルトの思い出に与えられるべき栄誉に関する報告を行い，彼の遺骸をパンテオンに移すことを提案する。メルシエもまた，若き日にデカルトの頌辞をなしたことを認めるが，この意見を撤回する。彼はニュートンを讃え，幾何学者とヴォルテールを攻撃し，コンドルセも彼らにだまされていたと嘆き，デカルトの著作を批判する。というのは，彼の意見では，デカルトの著作は自然に問いただす以前に自然を推測してしまおうとするからである。最後に彼は，この計画に関す

る議事日程と，デカルトのパンテオン入りを認める法律についての報告を求める。マティウー Mathieu, シェニエ, アルディ Hardy は，偉人たちの思い出に報いようとする。五百人会議はシェニエとメルシエの演説を印刷するように命じ，議論を延期する。」(Réimpression de l'Ancien Moniteur, XXVIII, p. 267-268) 以上が，デカルトのパンテオン入りをめぐる事実関係である。

ここに示されたように，デカルトのパンテオン入りを阻止したのは，メルシエである。また興味深いことに，メルシエは若き日にデカルトの頌辞を行なっている。これは1765年にアカデミー・フランセーズが『デカルト頌』という課題で雄弁術のコンクールを行なった際に，メルシエがそれに応募したことを指している (cf. Yamaguchi)。では彼の見解の変更をどのように考えたらよいのであろうか。65年から96年，30年以上も経ち，意見が変わったからといって，それ自体おかしなことではない。しかし，事はそう簡単ではなさそうである。哲学史家ブーイエ F. Bouillier は1765年のこのコンクールに言及した際に，メルシエに触れている。メルシエは応募したが受賞できなかった。「不幸な競争者のなかにメルシエがいた。彼は，デカルトに恨みを懐いたように思われる。というのは，五百人会の議員であった1798年（ママ，96年の誤り）彼は誇張した演説を行ない，デカルトの遺骸をパンテオンに移すようにとのシェニエの提案を挫折させた。」(Bouillier; 1854, t. II, p. 632 〔1〕, 1868, t. II, p. 641 〔1〕) デカルトがパンテオンに入れなかったのは，メルシエのデカルトに対する恨みであるというのがブーイエの主張である。これが正しいとすれば，コンクールの受賞発表があった1765年8月25日以後直ちに，彼がデカルトに対する意見を変更してもなんら不思議はないはずである。しかしながらそうした形跡はみられず，デカルトに対する敬意は失われてはいない。

メルシエはコンクールの行なわれた5年後の1770年に著した『2440年』の一章「王立図書館」においてデカルトへの敬意を示している。「ついに，わたしはフランスの作家の前に到着した。わたしは熱望して止まない

手を最初の三巻に差し出した。それはデカルト，モンテーニュ，シャロンであった」(Mercier, 1770〔1977〕, p. 162)。デカルト，モンテーニュ，シャロンは懐疑主義の伝統に属する思想家である。初期のメルシエは啓蒙主義の影響下にあり，経験主義の根幹にある懐疑主義へ傾倒するのは当然である。つづいて1781年から出版が開始されるメルシエの代表作『タブロー・ドゥ・パリ』でもデカルトへの敬意は変わらない。1667年以来，デカルトの遺骸が安置されているサント・ジュヌヴィエーヴ教会の再建に意見を述べる。「この聖遺物匣を壮麗な丸天井のもとにおさめようと，豪華な教会が建設されつつある。費用はきっと千二百万から千五百万，あるいはそれ以上かかるだろう。何という巨額な，そして無駄な出費だろう。それを大衆の貧窮の緩和にあてることもできたであろうに！　それに聖書も言っているように，外套として大空を，祭壇として大地をもつ人のために，いかなる神殿を建てることができるだろうか？　好事家は建物を見物に行くだろうし，下層民は聖女を訪ねに行くだろう。その工事は三十年前から行なわれている。デカルトの遺骨が在来の寺院の中に墓碑銘とともに横たわっている。その遺骨は，奇跡を起す聖遺物匣から遠からぬところに移されるだろうか？　何という組合せだろう！　聖女ジュヌヴィエーヴとデカルトが隣り合わせとは！　ふたりはあの世で語りあう。この世についてふたりは何と言っているのだろう？　しかしつつましきデカルトには聖遺物匣などありはしない」(Mercier, 1782-88. 原 訳, I-382.〔これは1784年執筆〕)。これが革命後にパンテオンとなるのである。メルシエは1793年10月3日に逮捕されているので，93年10月2日の議会で意見を述べる機会はあったことになるが，逮捕される前の日に議会に出席していたかははっきりしないし，意見を述べた記録は残っていない。後に述べる理由でたとえ出席していても反論しなかったと思われる。以上の点から，メルシエがデカルトに対する意見を変更したかどうかはともかく，デカルトを恨んで彼のパンテオン入りを阻止したというブーイエの意見が支持されないのは明らかである。後にブーイエ自身，1854年，68年のこの見解を，1879年に徹回している。

アカデミー・フランセーズのコンクールに受賞できなかったことが問題であるならば，メルシエはデカルトではなく，1765年度の受賞者に恨みを懐いたのかもしれない。この年は，トマ Antoine-Léonard Thomas (1732-1785) とガイアール G.-H. Gaillard が共同受賞している (cf. Yamaguchi)。メルシエがトマに送った1767年から75年の書簡が七通発見されている (Béclard, p. 74-76, p.790-796, et Le Correspondant... p. 376-384) がいずれも八才年上のすぐれた雄弁家になんの恨みも感じさせるものではない。アカデミー・フランセーズのコンクールで六度も受賞したトマは，当時25才の若きメルシエにとっては，自分の模範となる人物であったはずである。メルシエは，少なくとも三度はアカデミーのコンクールに応募し，その原稿を印刷に付している (Mercier, 1765, 1767, 1776)。彼がアカデミーへの道を夢みたことは明らかである。彼が恨みをもつとしたら，それはアカデミー・フランセーズに対してであったであろう。事実，アカデミー・フランセーズに関する彼の記述は揶揄と嘲笑に満ちたものである (Mercier, 1782-1788, t. III ch. CCLXXXVIII L'Académie française, p. 315-324.)。

1796年10月2日，五百人会におけるメルシエは，確かに誇張気味にデカルトを揶揄しているし，論調も攻撃的といっていいだろう。しかし，彼の演説が単に揶揄と攻撃に満ちたものにすぎないならば，五百人会を動かしえるはずはない。この演説には，デカルトに対する批判ばかりではなく，ヴォルテールへの告発が，さらには論敵シェニエとの対決がみられる。以下，この三点を順次考察しよう。

「ほぼ百五十年前，ルネ・デカルトがパリのある教会で，葬礼の栄誉を受けた。Il y a près de cent cinquante années que René Descartes a reçu à Paris, dans une église, les honneurs d'un service funèbre, ... そこには高等法院，ソルボンヌ，四学部の代表，大学総長，そして当時の神学者，法学者，詭弁家，悪しき自然学者らがすべて列席した。その後，雄弁家が現われ，声を高め，アカデミーの賞のために頌辞を述べた。」(Mercier, 1796, p. 1-2) この雄弁家というのは，トマのことである。こ

の演説の冒頭はトマの文体をもじって，彼を茶化している。トマの演説はこうである。「フランスに生まれ，スウェーデンで亡くなったデカルトの遺骸は，その死後十六年を経て，ストックホルムからパリに戻された。ある教会に集まった学者たちが、生前決して得ることのなかった栄誉を，彼の亡骸に捧げようとしたとき，……突然この追悼演説を禁じる命令が届いた。LORSQUE les cendres de DESCARTES né en FRANCE et mort en SUEDE, furent rapportées, seize ans après sa mort, de STOCKHOLM à PARIS: lorsque tous les sçavans rassemblés dans un temple, rendoient à sa dépouille des honneurs qu'il n'obtint jamais pendant sa vie, ... tout-à-coup il vint un ordre qui défendit de prononcer cet éloge funèbre.」(Thomas, p. 3) デカルトの遺骸の帰還は1767年であるから，「ほぼ130年前」というべきであり，しかも列席者も実際とは異なっているから，メルシエの演説は不正確であり，レトリックに満ちている。「告白しよう。わたしもまた，若き日にデカルトに頌辞を贈った。しかしその時は，アカデミーのなかで誉めそやされる名前にだまされていたのだ。」(Mercier, 1796, p. 2) かつて誤りを犯したとあえて告白して，発言者の誠実性と発言内容の真実性を相手に植えつけようとする巧みなレトリックで聴衆を引きつける。過去の誤りから立直った者の証言であるから，聞くがいい。諸君はわたしと同じ誤りを繰り返してはならないと。つづいて，デカルト哲学の内容を批判するが，これ自体は啓蒙主義の影響下での批判であり，1765年当時も懐いていたものである。ただ論調は激しくなる。「デカルトは自然をうやうやしく注意を払って研究するのではなく，自然を推測しようと望む傲慢な者たちのひとりである」(Ibid. p. 2)。コギト・エルゴ・スム，微細物質，渦動論などを批判したあと，メルシエは幾何学者としての名誉だけはデカルトに与える。「彼は偉大な哲学者ではなくとも，幾何学者である」(Ibid. p. 5)。当時つねに問題となっていたデカルトとニュートンとの比較では，ニュートンを評価するのであるが，ここでも巧みにレトリックを用いる。メルシエはニュートン哲学の導入者として，ヴォルテールではなく，モーペルテュイを挙げる。「モーペルテ

ュイが自らをニュートン主義者であると宣言する勇気をもった最初のひとである」(Ibid. p. 6)。これが正しいかどうかはともかく，1730年代からアンティ・デカルトの論陣を張ったヴォルテールの名を意識的に避けている。なぜならば，この演説で真に攻撃したいのは，あとでみるようにデカルト以上にヴォルテールだったからである。

65年のメルシエは，時代の潮流のもとで明らかに経験主義者であったが，96年の彼は観念論への傾斜を強める。経験主義から観念論への彼の思想の展開に介在するものは，おそらく1793年10月3日から1794年7月27日にかけての，ギロティンの恐怖をともなった牢獄での体験であろう。この観念論への展開という観点からみると，彼の演説はデカルトに対して揶揄と攻撃だけに終わるものではない。観念論からデカルトの生得観念をみなおしている。「デカルトが生得観念を宗教的に支持する場合に，彼は最も高貴な真理の道半ばにいたのである。しかし彼がプラトンと別れ，スコラの論理機械に迷い込んだとき，内なる神の存在 Deus est in nobis についての内的確信を失ったと思われる。」(Ibid. p. 7) プラトン的観念論から測定して，デカルト哲学を観念論への途上に位置づける。しかし，「彼は問題の高みに到達しなかった」(Ibid. p. 7)。デカルトを批判していることに変わりはないが，デカルト哲学のうちに観念論的側面を認めているのである。それ故，経験論には，手厳しい批判を投げかける。「彼ら（ロックとコンディヤック）は，感覚から独立した人間と宇宙の調和との内的な結合を少しも感じていない」(Ibid. p. 8)。

彼のレトリックは最後に冴えをみせる。「パンテオンは共和主義者の殿堂である。それを革命の英雄と殉教者に残して置こうではないか」(Ibid. p. 11)。極めて正統な論理である。しかもメルシエは，デカルトがパンテオンの前身であるサント・ジュヌヴィエーヴ教会の住人であることをよく知りながら隠しているのである。マラーとミラボーがパンテオンから追放されたことを指摘してこのようにいう。「寛大にパンテオン入りを認めないようにしよう」(Ibid. p. 13)。「作家の実際の栄誉はわれわれに依存しない。時間のみがそれを確かにもするし，破壊もする。彼らの神格化は書

物のなかにあって，他にはないのである。それ故に，彼らの著作のなかで生きるなり，死ぬなりさせよう。」(Ibid. p. 13) メルシエはデカルトに最後の一撃を与えようとする。「この大きな街で，どれほど多くの人々がデカルトと彼の学説を全く知らないことだろう。デカルトの書物を読んだ者はこの街に三十人とはいない。」(Ibid. p. 16) 過大な表現ながら，時代は確かにデカルトをほとんど読まなくなっていた。メルシエは巧みにこの事実を利用し，デカルトのパンテオン入りの阻止を謀る。

この演説で，メルシエはヴォルテール批判にも多くの時間を費やしている。まず，「アカデミー・フランセーズと呼ばれる精神の事務局」を支配する「殿様ヴォルテールの専制」(Ibid. p. 2〔1〕) を批判する。さらに彼の古典主義の虚偽性をルソーと対比して告発する。「今日，ソクラテス，プラトン，マルクス・アウレリウスの学説が無視され，最も高貴な古代の知恵と結びついている『サヴォワの助任司祭の信仰告白』がすぐさま忘れさられたことは，驚くべきことではないか。単純で宗教的な観念を放棄することにより，人間を導き，法律を作ろうと望んだヴォルテール，汝のすべての歩みは犯罪であった。」(Ibid. p. 8)

さらには，恐怖政治の原因をこうした経験論に認めようとさえしている。「人間精神の及ぶ限りでの，あれほどの殺戮と悲嘆を誘発した極悪非道の精神が誕生したことに，気づいたように思う。人間はもはや神性の鏡ではなく，憐愍の情も悔恨の念ももたずに，それを破壊した。物質的な感性ですべてを説明し，すべてを純粋な物理作用に還元しようとする罪深い哲学者たちの支配を準備したのは，大胆な自然主義者である。有害な哲学者は人間を動物にしようとしかしなかった。」(Ibid. p. 9) この箇所で，メルシエが直接に念頭に置いている人物は，議会の演台で自ら無神論者と名乗ったジャコブ・デュポン Jacob Dupont であり，ビュフォンの一節を盗んで論述するダントンなのである (Ibid. p.〔1〕) が，暗に経験主義の擁護者ヴォルテールをも指し示している。デカルト哲学の機械論的要素の故に，この思潮にデカルトも組み入れられているのである。経験主義が無神

論を生み出し，それが「ギロティンは穏やかな刑罰であり，死は永遠の眠りである」(Ibid. p. 9〔1〕) という思想を形成したとするのである。メルシエの論理の飛躍は明らかであるが，テルミドール九日によって，命を救われ，恐怖政治への激しい復讐心が，機会を捉えて炸裂したといっていいだろう。この体制の維持を望むが，彼は政治的にはテルミドーリアンでもなく，また思想的にはイデオローグでもないことに注目すべきである。それ故に，彼は五百人会で自らの立場から多くの異議を唱え，コンディヤックを批判するのである。ヴォルテールを追及するメルシエは，止まるところを知らない。ヴォルテールのパンテオン入りにさえ非難を向ける。「彼ら（勇ましく共和的な性格を有した人々）ならば，この偉大な詩人，すなわちあらゆる国王とその時代の偉大と悪とに媚を売ったこの偉大なる壊乱者に，パンテオンの扉を開けはしなかったであろう」(Ibid. p. 12)。さらにメルシエはヴォルテールをライプニッツの思想の改竄者としても告発する。「彼はライプニッツの最もすばらしい著作の『弁神論』のうちに，『カンディード』の主題をみいだしただけだ。この惨めな作品は，人に慰めを与える摂理の教義を攻撃している。」(Ibid. p. 13)

ヴォルテールの文学が彼の感性に合わなかったことは確かであるが，それ以上に彼の命と自由を脅かした恐怖政治への呪詛が，経験論から観念論へと彼を誘い，経験主義批判，ヴォルテール告発という形を取ったのである。デカルトのパンテオン入りの阻止は，彼への個人的恨みや彼の学説に対する批判が目的ではなく，またヴォルテール派とルソー派の対立の故だけでもなく，メルシエの生命を救ったテルミドール九日の体制の維持，擁護という意味合いをもっていたのである。この点はメルシエの演説の第三の要素である，パンテオン入りの式典についての彼の批判を検討すれば，さらに確かなものになるであろう。

メルシエは演説の最後にパンテオン入りの壮大な式典に触れている。「……われわれは古びた偶像崇拝を蘇らせないし，虫の食った骨を運ぶ行列などはしない。『生命の書物』を開こう，そこに天才の名を刻もう。そ

れで十分だし，人々は費用のかかる祭典，無駄な出費，時間の浪費をしなくてすむ。こうしたことは，時として奇妙な面をもつ式典にはつきものなのだ。」(Ibid. p. 15) ここでは，メルシエはパンテオン入りの祭典を問題としているが，革命期を通じてつねに祭典は大きな政治手段のひとつであった。テルミドール以後の総裁政府 Le Directoire においても，祭典の問題は政治的課題であり，それは左右に揺れ動く政治状況とも関連していた。この演説の三カ月後，シェニエとメルシエは共和国祭典の設定について，また論争をすることになる。

1796年7月に，7月14日の祭典と8月10日の祭典の両方を，テルミドール九日の記念日の祭典と同時に行なうことに決定した (Lefebvre, p. 212)。こうした傾向に抗して，シェニエは1796年7月26日に，7月14日の祭典と8月10日（92年に王政の崩壊を画した日付）の祭典をそれぞれ別個に行なうように提案し，これが採択されたが (Chénier)，時すでに7月14日を過ぎており，その祭典はできなかった。しかし8月10日の祭典は行なわれた。さらに，シェニエは8月14日に，9月21日（葡萄月1日）の祭典すなわち共和国の記念祭典の設定を発議する。これに対し，メルシエが反駁を行なう。「革命の敵と卑劣な過激共和派，さらに土地均分法に関する馬鹿げた，しかも貪欲な観念を打ち破ったあとで，共和国の時代を1792年9月21日に遡らせることが，一貫性をともなってできようか。否である。この時代は，われわれが自由な政府を有した日時に遡らなければならない。いや，共和国は，図々しい連中が国民の代表を攻囲したときには存在しなかった。《ぞっとする無神論》が勝利を収めた闇と服喪の日々が，共和国のものだというのか。」(cité par Lefebvre, p. 213) ここで明らかなようにメルシエは国民公会のできた92年9月21日を，むしろ恐怖政治の開始の日とさえ考えている。共和国の起源をどこに設定するかという問題は，フランス革命をどのように捉えるかという大問題である。メルシエはデカルトのパンテオン入りも，共和国の祭典の設定も，ともにジャコバン派のなした悪夢の再現につながるものと考え，反論しているのである。メルシエはアンティ・ジャコバン派ではあるが，王党派でもナポレオン派でもない。

シェニエは恐怖政治の前にはジャコバン派に属していたが，恐怖政治を批判した兄アンドレ André Chénier の処刑などもあり，恐怖政治の過程でアンティ・ジャコバン派に与する。しかし，革命の成果を守ろうと右派の攻撃に防戦するのである。「もとジロンド派のメルシエはすっかり反動になり，……シェニエの提案に反駁した」(Lefebvre, p. 213) と指摘するルフェーヴルの意見には素直には賛成しかねるが，祭典の問題を革命の評価に関わる問題とみる点は，すぐれた洞察である。最後にパンテオンとデカルトとの関係の研究史的回顧と十八世紀フランスにおけるデカルト神話の存在の指摘をしておこう。

本稿の冒頭で，デカルトとパンテオンとの関係についての研究を，グーイエのものが最初と紹介したが，十九世紀に，すでに二つの研究が存在する。これらは研究であるばかりか，十八世紀啓蒙主義下におけるデカルト観に異を唱えようとする点で，十九世紀のデカルト観を形成するテキストといってよい。そのひとりはエムリ Jean-Antoine-Xavier Emery (1732-1811) で，彼はサン・シュルピス修道院総会長を勤めた神父で，カトリックには困難な革命期を気骨をもって生き抜いた人物である。彼の研究は近代の四大哲学者，ベイコン，デカルト，ニュートン，ライプニッツをキリスト教の観点からみなおすという一点にあった。*Esprit de Leibniz* (1772), *Christianisme de Francis Bacon* (1799), *Pensées de Descartes* (1811) を著すが，ニュートンについては未完である。この *Pensées de Descartes* の長い序論で，彼はデカルトのパンテオン入りについての事実関係を丁寧に述べている。この件に関しては，エムリのものが最初のものであろう。第二のブーイエ (1813-1899) の研究は，事実関係については「卓越した神父エムリ」(Bouillier, p. 81 et 83) に負っている。前述のように，1854年，68年には，ブーイエはメルシエがデカルトのパンテオン入りを阻んだのは，彼に対する恨みからであるとしていた。1879年に Descartes et le Panthéon という研究で，この意見を訂正している。「彼（メルシエ）の自尊心がこの挫折（1765年のアカデミー・フランセーズの

コンクールでの落選）で打ち拉がれ，デカルトに対し長らく恨みを懐いたとは思わない。むしろ国民公会の議員，73名の容疑者として過ごした血腥い時期と，テルミドール九日により救われ栄誉を得た時期が，他の者たちと同じく彼にも，哲学と自由への愛を弱めさせる結果となったと思う。」(Bouillier, p. 79) 評価の違いはあるが，恐怖政治下での一年近い獄中生活のうちに，メルシエの思想的変化を認める点では，同意見である。

これら両者の研究には，十八世紀に形成されてきた「オランダで迫害され，フランスに疎まれたデカルト」というデカルトについての神話（cf. Yamaguchi）を払拭しようという共通の立場がある。エムリはシェニエの五つの誤りを指摘する。「1）デカルトがなんらかの圧力によって，祖国を離れなければならなかったというのは，真実ではない。生涯，彼がさまよったのは，旅行への好みのためである。…… 2）カトリックの聖職者によってフランスで迫害されたというのは，真実ではない。 3）彼が外国に隠居したのは，孤独への愛の故ではなく，必要に迫られたためであるというのは，真実ではない。 4）スウェーデンでの滞在ほど静穏で名誉に包まれたものはなかったので，仕事と嫌悪と悲嘆に打ちのめされていたというのは，真実ではない。…… 5）無知が狂信と自然に結びつき，あらゆる種類の専制君主が啓蒙の敵であることを，彼が自分の名高い悲惨でもって証明したというのは，真実ではない」(Emery, p. cxxxviii-cxl)。以上のように，微に入り細に入り，デカルトへの「迫害」を否定する。エムリの反論にも問題はあるが，その執拗な反論自体がデカルト神話の存在を証明している。ブーイエもまたエムリほどではないが，この神話の存在を肯定する。「彼（デカルト）の長期に渡る外国での滞在の故に，彼が亡命者，僧侶と国王たちの犠牲者であるかのように見られた。孤独への愛と独立への気性が血気にはやる共和主義者に気に入られる運命にあった。」(Bouillier, p. 65) このように，デカルト神話が共和主義者のものであったことを指摘している。ブーイエをデカルト研究に導いたクーザン Victor Cousin, 1792-1867）も，この神話の存在を簡潔に一蹴している。「誰がなんと言おうと，デカルト自身は決して迫害されなかった」(Cousin, t. II, p. 175)。

これらは，十九世紀のデカルト研究に，啓蒙主義とフランス革命によりつくりだされた十八世紀のデカルト神話の払拭が必要であったことを示している。

以上，メルシエの演説にある三要素，デカルト哲学の批判と観念論からの一定の評価，ヴォルテールが恐怖政治を支える思想的背景であるとの告発，さらには祭典がもつ政治的意味，これらが，恐怖政治下での彼の経験論から観念論への思想的変貌を促したことをみてきた。メルシエのデカルト批判は，一定の政治的見解からなされたというよりは，恐怖政治下での彼の実存的体験に帰因する思想的変貌によってなされたというべきであろう。

BIBLIOGRAPHIE

TEXTES

BECLARD, Léon ; *S. Mercier : Sa vie, son œuvre, son temps*, t. I. 1903.

CHENIER, Marie-Joséph ; Rapport fait par Marie-Joseph Chénier. Sur les fêtes au 14 juillet et du 10 août. Séance du 8 Thermidor. *CORPS LEGISLATIF*. 1796.

HENRIET, Maurice ; *Trois lettres inédites de Sébastien Mercier. LE CORRESPONDANT*, 1914-04-25.

MECIER, Louis-Sébastien ; *Eloge de Descartes*. Genève, 1765.

MERCIER ; *Des malheurs de la guerre et des avantages de la paix*. discours proposé par l'Académie française en 1766. 1767.

MERCIER ; *L'An deux mille quatre cent quarante* (1770). 1977.

MERCIER ; *Tableau de Paris*. Amsterdam, 1782-1788. Slatkin, 1979. （原 宏訳『十八世紀パリ生活誌』上，下（岩波文庫），1989年。部分訳。）

MERCIER ; *Eloge et discours philosphiques, qui ont concouru pour les prix de l'Académie française et de plusieurs autres académies*. Leipzig, 1786.

MERCIER ; Discours de L. S. Mercier, prononcé le 18 Floréal, sur René Descartes. *CORPS LEGISLATIF*. 1796.

Réimpression de *l'Ancien Moniteur*.

THOMAS, *Eloge de Descartes*. 1765.

Trouvailles et curiosités. *L'INTERMEDIAIRE DES CHERCHERS ET CURIOSITE* 1890. p. 220-224. Sur une page de Condorcet à propos de la pan-

théonisation de Descartes.

ETUDES

BOUILLIER, Francisque ; *Histoire de la philosophie cartésienne.* ler éd., 1854, 2e éd., 1868.

BOUILLIER ; 《*Descartes et Panthéon*》. *REVUE DE FRANCE,* 1879 (37), p. 62–88.

COUMET, Ernst ; 《La " Panthéonisation " manqué de Descartes》. *le* 31 *mai, LA PHILOSOPHIE ET LA REVOLUTION FRANÇAISE ; L'idéal universaliste et ses limites—Les droits de l'Homme* (le 31 mai, le ler et le 2 juin 1989, Sorbonne et Unesco)

COUSIN, Victor ; *Fragments philosophiques.* 3e éd., 1839.

EMERY, l'Abbé ; *Pensées de Descartes, sur la religion et la morale.* 1811.

GOUHIER, Henri ; 《Descartes à la Convention et aux Cinq-Cents》. *REVUE DE METAPHISIQUE ET DE MORALE,* 1922 (29), p. 243–251.

LEFEBVRE, George ; *La France sous la Directoire* (1795–1799), 1977.

YAMAGUCHI Nobuo ; 「『デカルト頌』：1765年アカデミー・フランセーズの雄弁術に関する懸賞論文(上)——十八世紀フランスにおけるデカルトの運命に関する思想史的考察(1)」『岡山大学文学部紀要』第14号（1990年）

「『デカルト頌』：1765年アカデミー・フランセーズの雄弁術に関する懸賞論文（下）——十八世紀フランスにおけるデカルトの運命に関する思想史的考察 (1)」『岡山大学文学部紀要』第15号（1990年）

（岡山大学文学部助教授）